

【これまでの里山探訪&スケールアップウォーキングはこんな感じです！】

なんて自由！なんて自然なヒグマの姿！これは去る9月2日にソフィ受講生の皆さんと知床羅臼を旅して見た

ヒグマの写真です。知床半島先端に近い「ぺきんの鼻」にて。数日前から遡上しはじめたばかりのサケをさっそく?まえにきた、何の屈託もない、野生そのものの熊の姿です。

私達はそうっと、海の上の漁船からその様子を眺めさせてもらっていました。

まだ痩せていますが冬眠に入るまでに100kg近く体重を増やすという大人のヒグマ。海に潜っては獲物を探し、思いっきり水しぶきを上げては大きな手でサケを捕まえよう何度も何度もチャレンジ(意外に鈍クサクかった)。やっとつかんだサケの皮をはぎ、紅色の生身を独り味わう。実に悠々と。



そりゃあ美味いに違いない。これから何日もこの場

撮影：佐藤伸司(羅臼観光協会)

所でそうやって狩り続けるのだろう。獲っては食べ続けるのだろう。

無防備で孤独で…そしてなんて自由なんだろう。

☆「羅臼を歩く 生きものの優しさに触れながら」の旅ではヒグマやシマフクロウ、マッコウクジラを見たり、羅臼独特の森をウォーキングしました。創企舎ソフィではこんなふうな「ちょっと変わった場所」を選んでカルチャーな旅を企画しています。よろしければ今度ぜひ一緒にいかがですか。

「壱岐島を歩く～古代の森と黒潮の道」

夏の終わり、台風の間隙に壱岐島にて3泊4日のウォーキング。目の覚めるようなブルートパーズ色の海、不思議な形をした岩、日本史の教科書には載っていなかった元寇の史実、使われることなく終わった砲台の跡、古代「一支国」を島肌で感じるような風景。壱岐島だけで4日を過ごしたので、島のあちこちをゆっくり歩くことができました。その



土地を見て通り過ぎるだけでなく、実際に歩いてみるといろいろなものが見えてくるのが面白いところ。台風10号が通り過ぎた直後に島へ到着し、12号が九州南部でノロノロしている間に、嵐の前の静かな海峡を通過して無事帰還しました。(2016・8月31日～9月3日に催行)

「懐かしい里山風景を訪ねて」

第1回は飛騨市神岡町山之村へ。この日も前日までの豪雨予報をくぐり抜けて、時折、雨の止んだ雲間から秋の澄んだ青空が。飛騨市の奥、標高約1000mの山之村までは、往復ともに名古屋から4時間近くかかりましたが、やはりここまでくると残暑の街とは別世界。少し肌寒さも感じるくらい気温です。少し色づき始めた木々、秋の花が咲き、豪雪に耐える「板倉」の倉庫が建ち、家の前のきれいな湧き水で、赤かぶを洗っている人にも出会いました。日本の山里そのままの景色を見ながら、同行講師・伊藤栄一先生の熱い解説も加わって楽しいウォーキングとなりました。でも



現代文明に侵されているとどうしても「この辺の人ってどこへ買い物に行くんだろう」「街灯が全然ないから夜は真っ暗だろうな」「車がないと生活できないんじゃないかしら？」・・・等々つい考えてしまうのが悲しい。(2016年9月29日 バスで日帰り)

☆創企舎ソフィでは、こんな「ちょっと変わったテーマ旅」を企画しています。よろしければぜひ一度ごいっしょに！(※会員限定グループ旅行)

今回は「里海」へ。



三重県尾鷲市須賀利は深い入江になっているので古くは往来する廻船の風待ち港として栄えていたそうです。平地はごくわずか、山へびっしり張り付くように瓦屋根の民家が建っています。集落を歩くとみかん、お

菓子、生活用品、洋服…etc がすべて店内に揃っている懐かしい「よろづや」のようなお店や、銭湯だったタイル張りの建物など、まさに漁村の暮らしの風景。観光地化されていないのです。昼食は集落のおんぼん(土地のことばでおばさん)が心づくしの漁師料理をふるまってくださいました。



申し分のない晴空と深い青緑の海を眺めながらの楽しい食事で、おんぼんの歌う尾鷲節にも耳を傾けました。「今はとてもいい景色だけれど、夕方や雨の日になると人がほとんどいない。子どもも少ないしね」と、地方過疎地の寂しさも。南海トラフ地震が起きた場合の想定では、この地へ押し寄せる津波は10mともされていて、集落のあちこ



ちに避難経路も設けられていました。ウォーキングを始める前に伊藤先生が「今日の散策にあたっては、須賀利の皆さんの生活空間にお邪魔するんだ、ということを忘れないように」と言われたことにも納得。

【フォトあれこれ・・・】

